

伊藤祐二（作曲家）

ユージ 芹に

気をつける

’82年生まれの音楽家、小西麻美の口から芦川聡の名を聞いたのは衝撃だった。作曲家、芦川聡は’83年に30歳で他界しているのだから……。

芦川聡の葬儀の時、主を失った空間に彼の「環境音楽」が流れていた。その瞬間の記憶は今も鮮烈に残るが、数十年経って、西武劇場、美術館、アールヴィヴァンと共に、私の中で彼の名は最早追憶の領域に属していた。しかし今、彼は、アンビエント系の音楽家の間で国際的に再評価されており、そうした事情で、小西麻美から芦川聡の名前を聞くことになったのだった。

芦川、私と、ほぼ同世代の作曲家、菅谷昌弘も、近年同様な再評価を受けている。先日、彼の新譜カセットテープ「しるしまみれ」が届いた。録音した環境音と、彼の書いた劇伴が交互に配置されている。この形にありがちな「安易で感傷的な相互浸透」を心配した私は愚かだった。環境音は周到に編集加工されて

おり、抽象的で強く、テクスチュアとリズム、そして「きめ」を持ち、明らかに具体音でありながら、音楽に接近する。劇伴として書かれた音楽は、音楽として抽象的だが、どこか余白を残しイメージを孕み、具象に接近する。絶妙な配置で並置され、出会うこれらは、安易な感傷を跳ね返し、非常に硬質で、抽象と具象の間に、美しさと意味の間に、聴き手を引きずり込む。見事なものだ。

そして聴き終わり、カセットを取り出した時、すべてはこのカセットに確かな手触りと重さのある小さな物体のなかにあつたことに呆然とさせられるのだ。

エンリーケ・ピラマタスの「ポータブル文学小史」、マルセル・デュシャン、フランシス・ピカビア、トリスタン・ツァラ、アンドレ・ブルトン、ポール・モラン、ジャック・リゴー、ジョージア・オキーフ、マン・レイ、ジョージ・アンタイル、エドガー・ヴァレーズ、モーリス・ブランショ、シルヴィア・ビーチCCの。この冒険小説(?)と言うべきこの作品は本当に魅力的だ。これら多数の表現者たち、しかしすでに追憶の領域にある表現者たちを、本当に見事に、痛快に、動かして見せる。(解説氏の助けによると)こ

の作品の背後には、レーモン・ルーセルの「アフリカの印象」「ロクス・ソルス」が隠されている、と納得の教示。

この本の終盤に、次の一文がある。「歴史の真の顔は一瞬のうちに通りすぎ、過去は一つのイメージしか残さない。歴史の真の顔はわれわれが目にする瞬間に強い光を放つが稲妻のようにきらめく非礼な態度と同じで、それを二度と目にする事はない。」(C)

エンリーケ・ピラマタスはもちろん、一つのイメージで過去の表現者を語ることを拒み、その光を、彼の文学上で再び点灯することを試み、ルーセルのような、そして多分、リラダンの「未来のイヴ」のような語り方で、通時性と共時性を操り、この「通底器を思わせる作品」(解説氏)を可能にしている。本当に見事にして魅力的。

菅谷昌弘は新作を届けてくれる。私たちは彼の放つ光を今、この瞬間に見ることが出来る。しかし、芦川聡はそうではない。だとすれば、私は、一つのイメージで芦川聡を語ることを拒み、どのような通底器を作れば、彼の光を再点灯できるか考えるべきだろう。そうでなくてはならない。